中村麗

日本生まれ、ブラジル育ち、1996年ドイツに移住。フライブルグ音楽大学ピアノ科卒業、ザールブルッケン大学大学院現代音楽科修了。

ピアニストとして、ヨーロッパを中心に、日本、アメリカ、南アメリカなどでも演奏活動を行う。

2007年より、自身のライフワークとなるピアノとマルチメディアのためのプロジェクト

”Movement to sound, Sound to Movement”を始動。作曲家たちとの緊密なコラボレーションにより生み出された作品を初演し、注目を集めている。並行して、様々な作曲家への委嘱を積極的に行い、数多くの新作を初演している。また一方で、シモン・スティーン・アンデルセン、マーリン・バング、クリスティアン・ヴィンター・クリステンセンといった作曲家たちから、コラボレーションや初演を依頼されている。

ソリストとして、指揮者ブラッド・ラブマン、ミヒャエル・ヴェンデベルグや、バス・ヴィーガース等や、南ドイツ放送局交響楽団（SWR Symphonie Orchester）、西ドイツ放送局交響楽団（WDR Sinfonie Orchester）、ベルリン放送交響楽団（RSO）等と共演している。

これまでに、エクラ・フェスティバル、ウルトラシャル・ベルリン、フェスティバル・アハト・ブリュッケン（以上ドイツ）、ワルシャワの秋（ポーランド）、サウンド・オブ・ストックホルム（スウェーデン）、マンデー・イブニング・コンサート（アメリカ）、日本現代音楽協会主催・世界に開く窓（日本）等々、数多くの音楽祭に招待された。

アンサンブル活動では、南西ドイツ放送局エクスペリメンタル・スタジオ所属のEnsemble Experimentalのメンバーであるほか、アンサンブル・エコイ（アメリカ）、アンサンブル・ニケル（スイス）、ネクスト・マッシュローム・プロモーション（日本）等々、世界各地のアンサンブルのゲストとして招かれている。

2023年ダルムシュタット国際夏季講習会でのゲスト講師を務める。またハノーバー音楽大学、ブレーメン音楽大学、フライブルグ音楽大学、フランクフルト・ゲーテ大学などでのマスタークラス、レクチャーやワークショップ等を行う。一方で、2021~24年には、ストックホルム音楽大学での、ジョージ・ケントロス氏（ヴァイオリニスト）率いる ”現代音楽の洞察力を活かした、クラッシック音楽の解釈に関わる芸術研究プログラム”に参加するなど、研究者としてのキャリアも継続させている。

2021年には著作、”Movement to  sound, sound to Movement - Interpreting Multimedia Piano Compositionsが、ドイツWolke社より出版された。また音楽、芸術、パフォーマンスの類似性（や融合性）をテーマとする観察と理論的アプローチについてのエッセイを、現代音楽専門誌「Neue Zeitschrift für Musik」や「MusikText」などに度々寄稿している。